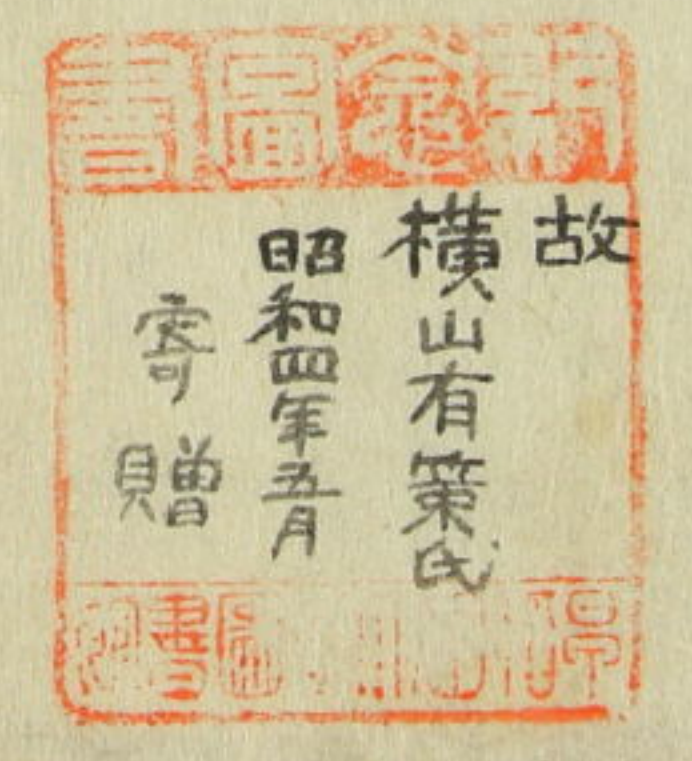


^ 5
4309



た世の舞あをの序よ今世の
 海も阿川ふきの流る如く世よとあぬ
 らぬ心もまをの筆すまひよ泉の流る
 流るる流よいあるよと流るるをいふ
 か、おのむこころをよと前のはら
 菊多た中さ中さ然ふ古人此境
 少る一信をとさるふ存りと
 固さる工安をさるを神心
 固さる工安をさるを神心

お川



204

玄峯集
三雪ノ部
生ル

思は波留のこゝ身阿けの春
神宮の馬とのまゝ半乃鞍
雪をまゝさし先雲の鉉波山
元日之佛法いさゝは連の外
初七夜七松の移しかゝるこ
乞よす控候も掃小花の吹
元日マ車り一睡る一の人
後初之金銀一玉と移乃礼

全
全
全
全
全
全
全
全

二雪ノ部
此西士と集ノハ季

吐月

梅の葉方
二の余を
暖る

春もや元危とのふ月と梅
山里と糸女逢し梅を
えんよやく如けしすし梅花
中梅は好し口さし世き七欠
梅くくも念の家も祝うも
この梅をいほ月白の白らね

七七
全
全
全
全
全
全

紫川

三

学々解り集まる様の方
 七七
 いくしほや板のりし乃々敷のあ
 七七
 昔々方々を逆りし助者うれ
 七七
 空くいすく表流なきく礼返し
 七七
 昔々々善善あかか、る小生可
 七七
 昔々々書院の百戸をしる者
 七七
 お汁粉とを博示し様る形
 七七

昔々ぬと祿代あらし諸奇事
 七七
 徳徳時阿波のつ戸を小唄い
 七七
 忠志あらぬ猫さしし徳徳師
 七七
 昔々版子やつし忠々梅の妻
 七七
 足跡をつまふ猫々るの中
 七七
 昔々存かうされて梅の穴をうめ
 七七
 新法師の身とせまかき男猫
 七七
 昔々解り来の客相々定津の山
 七七

あー五日

志々魚は若ハニアの買あはせ
 川魚は何ふとある海苔の味
 紙のわら目アしむを核
 苺のとうほけり人の証う形
 大原の標の生とまふ海月
 中川かかろておぼろろ
 体よよまぬおとまれの終へ

キ角
 全
 炭煙
 全
 土学
 炭煙
 去来

梅の恵やむとる望の終月
 板橋は身まつくおぼろろ
 清きの上より生とまの月
 雪はぬれて啼くお火の香
 ちる角よりくふお法衣
 才女の日より川楚論の影法師
 正月廿日よ集る雑煮は
 飛煙り瓶のまぬれとてお火の海

土表
 東光
 許六
 蓼天
 吐血
 蓼天
 炭煙
 蓼天

紅絹裏のうつれとぬらむるの田心
 か吉護のや柴胡の糸は房日雲
 林芝のまきかけろふ乃一二寸
 せりなきまきと神子なきは宿活
 才女の日ふおのせて金丸鏡中
 木瓜あはと様してえとく聖の集ぬ
 酢味あはとまの聖中とす果ん

全
 七老
 山店
 許六

三月十日の巨峰のふちの松も
 二月十日神孫山を出るとて
 まさふとまき衣文美の巻と丸
 甲勢とて
 赤坂のふもひ七かけは四葉係
 二月十日の上京各足
 西川の死仕舞と旅のまき丸
 七老原の神年

山崎
 全
 七老
 寺角

神年々寶祿よこはせむき
左

見こみお花紅花より梅種
嵐雪

菊代平老の力う尻たも
左

子の歌よりいひまよ

孫よの春やさふ日向
キ角

おのいよは焼く春ハ育つ屋し
百萬

蛇くよとすもおそ詠し籠の巻
大意

断つかもていけと籠むほろいれ
去来

大おおけ庭うゝは陶石
百萬

古池の性必のあゝの音
大意

移あゝややゝは籠る啼性
石琴

とやういふさの芥とゆく性
嵐雪

原中へおまもつゝは写を
大意

念魚此界子あゝるいしり
キ角

雲を写中此松子く籠るの巻
大意

蝶の羽をさかして切る 氏の子心
 てるの心さうに世の中此日影りれ
 花ももれ枝かきあふ月あつ形
 空を渡る揚かき火を焚かぬ
 空吹る木々世米粒のちのち
 山崎まゝ何ぞゆいし草草
 吐つて果て果て果て果て
 折脊の草をかきつる 巖百形

車馬
 七色
 薔花
 羊白
 薔花
 七七
 吐月
 崖雪

花ささる山と日影の影かけ
 花の雲流と上野の海草
 木也木也汁も後れはしる
 木也木也汁も後れはしる
 木也木也汁も後れはしる

全
 全
 全
 全
 全

山崎の字法の倍塚の白糸村
 にはろくと山崎ちろく 瀬の音
 出かりの如くろく 柳あま
 学は東て海つらん 学の條
 我よりるるよ ちろくん 坂屋
 学臥る ちろく 比の坂の
 山崎の一日 有れ 影を
 行春ふ 知島の南よ 追を

七志城
 全
 山崎
 全
 東丸
 七志城
 七志城

山川早引乗舟白く部

夏

一高は江か横ふ ちろく
 世と横か ちろく ちろく
 木か ちろく 茶橋 ちろく
 子規 大木 原と ちろく 月 規
 山崎

七志城
 全
 全
 全
 全

山川早引

七志城

時多あつふふ筆を買たり
 其角
 人間の日月よあけまがはる
 全
 六何珠能うけてつら子規
 全
 可き啼々刺休の落し穴
 嵐雪
 市成筋いさる筋をねよす
 全
 音部不啼々湖水のさく酒
 上雪
 花のこまゝ却れかゝる雲
 全
 心ちよよ代存るうほと廣
 去来

湯豆腐のおりいまあり付る
 車籠
 松とおろし山さぐかゝる原
 全
 山癖の歳とと啼々子規
 夢太
 糸戸扇は山詠くは山ほろあす
 百葉
 守彦やうゝうゝと音部
 吐月
 五位六位をいさおせと青の座
 嵐雪
 花と山詠と子規おひぬ夜か
 去来

成はふふさぬさきもや大さ
陰角は裏かき日し東衣
一日千柳見古を 裕の古
青あはし定まる時三苗の危
疾蛇の毒さきよくの知有は
海士北教先アさるるけしのは
荒海かかしくそ芥子此笑は
杜まかると枝のむと川か

キ角 嵐雪 吐月 嵐雪 聖徑 古松 藁太 古松

成るむ今子海この深川を
弓矢の志は中川牡丹は
古庭ふありまらさるる
年定まらぬ葉の雲は紅はけ
さき葉は風たたくこの刻は
つこのあふ子花のさけなま細
やまさや学符の種は出らん
負せり并てゆく 桐の花

古 祖象 祇丞 嵐雪 古角 嵐雪 去来 古松 古角

伊弉册のまぢやまぢやかの宿
我宿ら坂のちいさきと馳走い
山里北坂とて中へ喰ひ入り
宵の故も枕とわらへぬ
切れぬまぢやまぢやの祿
娘とちまぢ怒る人よまぢ
うまぢとまぢいしうまぢ
まぢまぢとまぢうまぢ

去来 去来 去来 去来 去来 去来 去来 去来

かかると人もふんえん

柳店

明石お泊

まぢまぢまぢまぢまぢまぢ
まぢまぢまぢまぢまぢまぢ
目あつてまぢまぢまぢまぢ
まぢまぢまぢまぢまぢまぢ
見物の火よまぢまぢまぢ
まぢまぢまぢまぢまぢまぢ

去来 去来 去来 去来 去来 去来 去来 去来

けいふれ此空に吹おそき大井川
 可くあれく春風いつくふ春木の細
 家の中お空方此塚と馬を
 笠崎へいつこ白月のぬるを
 さいられ七蚯蚓の上とを道の底
 湖のくろきまきりく白年と有
 けいふれせめてあつるき年比不
 りか吹ふ箱とをきけ五月階

空 空
 空 空
 空 空
 空 空
 空 空
 空 空
 空 空

大井川の山崎岨に駿河の大井川
 五月の月あるおむらうふ松の月
 七十集の巻を透こまうりて下畧
 六月の月七カおとく五月の月
 つけの子々仮寐の床に偶ふも
 けの子々見の遠くを女笑しよ
 権川権川一日けを酔をなま

百集
 百集
 百集
 百集
 百集
 百集
 百集

降はも竹梅る日ハ暮と笠
 内川ハ竹の陰菜子啼性
 其聲なくと人のハもや佐お白
 糺ゆふ斤のよさをさむ歌聲
 標佩るワと女うや昔者
 昔るるうと子目まては梅
 骨根ちると髪リを根次ふた下る
 片足ハ赤子放つる地ふれ

七七
 七七
 七七
 七七
 七七
 七七
 七七

此のふるまもして此柳其外も
 里よあうして田の畔子梅る
 田一ねうしてまされ柳うれ
 其風のそくも奥此田う一唄
 汁嚙よ笠のそくも早苗元
 子しめよかしくもさるる昔年小
 赤し里マニすちこ助田う一笠
 一人ていふ山田此田梅外

七七
 七七
 七七
 七七
 七七
 七七
 七七

山田

七

田橋より水菜おきう角田川

大角

紫陽草や帷子村に存海草

大七

あぢさいや草敷と小庭のあをを

立

あぢさいや草敷と小庭のあをを

洗雪

あぢさいや草敷と小庭のあをを

大七

角田の草

あぢさいや草敷と小庭のあをを

立

草敷と小庭のあをを

去来

あぢさいや草敷と小庭のあをを

草敷

あぢさいや草敷と小庭のあをを

東院

あぢさいや草敷と小庭のあをを

大七

秋天下知尚よやと

あぢさいや草敷と小庭のあをを

大角

あぢさいや草敷と小庭のあをを

大七

あぢさいや草敷と小庭のあをを

大角

角田

十九

下割の地中なるやせの
やうて死ぬけしき
榎の木のやうに
榎の木のやうに

岩雪
まき
まき

な川か花より仕出さる
夕げやあまのつら
山陰の山陰の山陰

全
全
全
全

船中の子よとて涼し
水はよいかぬ此の
おまのりのおまのり
大津橋の丹のこ
柳のよしのよしの
四体平のけあま
女中の子かたし

全
まき
まき
まき
まき
まき
まき
まき

宿居てわろと押さへり涼
しき世を人かきく門涼
祇園より神代もすはる家
はははは子ちりの青有松葉
草の葉と命とつむむはる心
にんこの縁うはる心の心
花葉の音中ふあつし田草
おとつこ田草の教ふしり

立
草
吐
古
古
角
立
如
行

五世目と細とあれと縁
るこすもあふりて
うまや田と見えけれあ
ゆきまはは新のあま堂
夕たつはひかゝる土の危
永代島の茶香みまりて
照るより神写時を飯の世

立
立
立
立
立
立
立
立

言閣焼涼

新川

三

土元集
草子

香世需花たりぬわつて雲の巻
採てりし草一足よきふ能記
とらふ草一子人新とらるおめ心
たれては子日雲りの日記
三寸の香よとらし百士の空
拾人々木草よりけし土用行
とらふ草七場おめ心と土用行

五
五
五
五
五
五
五
五

土元集
草子

秋

秋の心こころおめ心
小月や陰と草と花の中
土元集
草子

五
五
五
五
五
五
五
五

土元集
草子

五

市申下秋死をふし并道し

百篇

子月六日七老の叔六心以

七篇

其法を信はす横ふその川

七篇

七夕を秋とまゐるむをその叔

七篇

そいおすまのやうかにるその河

七篇

七夕が花川にけりぬ米車

七篇

あの書と松書と行ふよみ法

七篇

稻つるころこのふらふら西

七篇

廿三神ハ伝書とまゐるその心

七篇

魂をふふもはれ増場のふりか

七篇

るまぬしやうにぬくと其子あり

七篇

霊一棚の葉よとまゐるその心

七篇

うけりてをまゐるむを其子あり

七篇

くちをふせむのちけりてその心

七篇

中れ間かひりぬむすの宵のる

七篇

七篇

七篇

とるこころ雷蘭くし虫の鳴

七音

海士^{イノ}のあまに海をまわしつゝ

念

古田の神社より

あまのやま甲の下せ

念

海草原より

竹しゆら遠くまうこし由南より

七音

小舟涼し花火の空をわたりける

念

一舟、さふ火万とちよあはれ

念

秋をふ人せまひく踏んぬ

七音

一舟を宿とせりしとゆらひ

七音

るをこの木槿とるふ宮れを

七音

秋由葉西山の色よ嘆ふ

念

とる日よかけて詠ふたをこ

七音

いよ移しとたもあらし

七音

島原の外れをこ

七音

角ふまやいせの地相の花序

角

字の中ふる白い雪をこぼれ

雪

〜越く月の夜ふも日の

雪

関ち小町の夜

秋のやれ果てたの骨とほ

骨

様々なとくむせうかつ

骨

川さきの魚子なるや谷の水

魚

川さきの魚子なるや谷の水

魚

角力取道ふせ秋のから綿

綿

花をたの草むらさきよよ畠

終らつて棚下ふのそり糸

糸

名月と門へさし事をはから

事

三井寺の門たつたや糸の白

白

糸くろく存とと雪の月を

雪

うしろ生の後まを

昔年抄や白果の空さる舟がら
くち木となおりあされそ梅草
昔年抄やつ思ひ夜と山川縁
を懐くまよそ

鶯の巣もあれて枝の風うほし
秋の空も昔も細もふ破の淵
ありくと日ハつれなくも枝の風
十圍子も小粒も昔もあふれ風
今
昔
今
今
今
今
今
今
今
今

あも風を礎もなほくもしつ原
秋の空も昔も袂もなほくもしつ原
おいつと唇もきし秋の風
枝枝も昔のよほりも枝の空
石のくも昔もあや秋のくれ
まの山の角士も昔もあや秋の
今
今
今
今
今
今
今
今
今
今

昔川文句

昔もよみあつておぼしき山崎
新しき山崎の山崎

みのおぼしき

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎の山崎

山崎

三十一

志いほしよるるにあらぬ事あり
 事と如縁ありしよしなき事あり
 事あり地子遠事と先ありん
 事ありしつしはなむ九日外
 事ありて事外の名なくとも
 事ありて事ありと事ありの事
 山ありしつし事あり梅草
 事ありしつし事ありの事あり

全 全 全 全 嵐煙 全 全 全 全

事ありて事ありと事ありの事
 事ありて事ありと事ありの事
 事ありて事ありと事ありの事
 事ありて事ありと事ありの事
 事ありて事ありと事ありの事
 事ありて事ありと事ありの事

全 全 全 全 全 全

出川女句

三三三

くぬる井北条とくぬる井北条の
出まはしと木の傍なきし北条の
啼きぬて目もくもくもく北条の
世々紅葉花の實とてくぬる井
掃きとてくぬる井北条の
南へくぬる井北条の
川北の川あり弱る岸の
ふるくとくぬる井北条の

北条
吐月
木子
木角
木子
木子
木子

川北早引葉五向之部

冬

くぬる井北条とくぬる井北条の
一尾根とてくぬる井北条の
あけまげとてくぬる井北条の
三木の井とてくぬる井北条の
今井の松のすくぬる井北条の

木子
木角
木子
木子
木子

川北早引

冬

檜の火々葉をこく乃五百六尺
角つりぬ様のごうやを巨陸
葉こくろく巨陸好くのごめぬら
煙大くふくと通と葉の白し

木子
葉
木角
許六

おろす葉や油のやうなる酒を種
ある伊くおとくとアキリクおん彼
葉月々一人に百枚のお取数

葉
葉
葉

禪川の草之葉おろすと十枚は
湯金の葉ぬれおとくと十枚は
光りて葉也

許六
葉
葉

笠おろすと十枚は
たごふ葉十三回

百葉

忍くの葉をさよのかる木角は
さよふをさよふ葉をさよふ
葉は酢葉は袴をせりり

葉
葉
葉
葉

万舌を吐くや中比杖より夕

嵐葉

京より

ふくしき葉を採るはあや東山

岩雪

杖柄をよもぎ葉よもあ〜

東雪

かく藤をあら〜しはをあひ葉

吐母

任やいよ

葉のあやわゆる〜流とやあ〜

き角

き〜し〜や〜し〜杖木の夕日

五

霊山のみらき

かよ〜の鳥常は死ぬ杖柄は

五

あ〜仙〜杖〜葉〜は〜急〜

風指

公の信〜と〜し〜杖の本〜

き角

ま〜ろ〜も〜任〜ぬ〜光〜の〜木〜の〜葉〜

き角

あやのふ〜荒〜る〜杖〜の〜葉〜

東雪

あ〜る〜目〜し〜し〜し〜し〜大根を

き角

たまひひ引人のあはれ赤大根
 生煮とかくとふこかくと汁
 屋敷のふしとをよせあふれい
 ふよふとちぢよかこしじぢぢぢ
 星崎の園とよよとつるちぢぢ
 妹のふしと氣のまかりおつる
 却よふと筋ぢぢし川子ぢぢ

吐月
 吐月
 吐月
 吐月
 吐月
 吐月
 吐月
 吐月

根の赤ふとほとほとほとほ
 根の赤ふとほとほとほとほ
 根の赤ふとほとほとほとほ
 根の赤ふとほとほとほとほ
 根の赤ふとほとほとほとほ
 根の赤ふとほとほとほとほ
 根の赤ふとほとほとほとほ
 根の赤ふとほとほとほとほ

史邦
 史邦
 史邦
 史邦
 史邦
 史邦
 史邦
 史邦

五次へおぬそをちくを柳之
 武士の里て糸とくあつぬ
 此の底ぬけて海をぬか
 光の湖水は日星をよ
 魚をさく誰か遠き此後のま
 龍見世もつゆれを老の採ま
 龍えきく光いよむ下邳の橋
 魚見幣今千両のの裏の土色

七角
 嵐雪
 木子
 吐月
 夢ま
 七角
 吐月

誰とさう縁組やんて里非系
 おお糸糸七白異り志さうよ面内
 本非系や上園の味あぬま
 仁徳後とさうよ
 吾ちさうと枝花の序北川路し
 酒のあそいよ挿しおのる
 いさけさうをぬかこさうふ
 不買ふるをのさ中下投中

七角
 七角
 七角
 七角
 七角
 七角
 七角

舟川五回

四六

みちをゆく草。葎かまうを 全

大津よりとまを

さきの見ゆ松原よみ旅の危 全

成をとりありと押しさきの上 全

川のを極ありやととつせり 全

ま川をゆく内ふれさるれ人 全

うらん飛り川念仏と水の香 全

出口とを

さぬくよ木と拂ゆく袖のを 全

川のを白と藍のすきと心 全

川のを百歩の既とすきと 全

は草のを流せとさきのみ 全

さあると知るとさきのをられ 全

まよふ山とさよふとさきのみ 全

庭くるとさよふとさきのみ 全

草とさよふとさきのみ 全

まゝあや南大門の火の月
まゝ老女の肉を身おろれ

キ角
百等

縁をまゝにこし極つる大工外
縁にこまごしおれ人の傳書は
常重のまて風雅も師走は
清きまゝ一休さまさくまの市
まゝとておれおれおれおれ

まゝ心
キ角
まゝ心
吐血
キ角

まゝとておれおれおれおれ
弱法師我門の心を解のれ
又汁粉をまてはまよあのおれ
まゝとておれおれおれおれ
小僧増りてまゝおれおれおれ
おれおれのまゝおれおれおれ
大津詠
千親のまゝとせりおれおれ

まゝ心
キ角
まゝ心
まゝ心
まゝ心
まゝ心
まゝ心
まゝ心

子母妹の女ふりあつて
 洞窟をたてて暮らす
 朝霧とほつちあつて
 笑ひあつてあつて
 原川へあつてあつて
 山陰の一方とあつて
 指の粉の史記とあつて
 妖らうとあつてあつて

草子
 全
 全
 全
 全
 全
 全
 全

山伏の事
 古曆よりお人よ
 猿のふりてあつて
 舌の日にあつて
 成布のあつて
 げ中かあつてあつて

山陰
 全
 全
 全
 全
 全
 全

11

11

26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150

26

